

第十八章

人口原理による絶え間ない窮迫が、私たちの希望を未来へと向かわせるかのように思われる——試練の状態は、神の予知という観念と相容れない——世界はおそらく、物質を精神へと目覚めさせる巨大な過程である——精神形成の理論——身体的欲求に基づく刺激——一般法則の働きの基づく刺激——人口原理に由来する人生の困難に基づく刺激

生きるとは糧を得るための生計の厳しさに絶えず追い立てられ、窮乏の圧力にさらされ続けることだという現実を前にすれば、地上で完全な状態を達成できるという合理的な期待はほとんど持てず、希望はおのずと将来に向けられることになる。さらに、これまで見てきた自然法則の働きが避けがたく生み出す誘惑の存在は、この世界を、よく言われるように、より高次の幸福への準備として試練と徳の訓練の場、すなわち徳の学校として浮かび上がらせる。しかし、ここでは、身の回りに見られる多様な自然現象と、神の力や善性、先見、予知といった観念によりよく適合する人間のあり方や位置づけに

ついて、従来とはやや異なる見取り図が示される。

「神のなさることの正しさを人に示し、その理由を説明し擁護しようとする営み」は、自分の理解に慢心せず、世界の出来事をすべて説明しきれないという限界をわきまえて進められるべきである。わずかな光にも感謝して受け止め、光が見えないときには外ではなく自分の内にある暗さに原因を探り、天が地よりも高いように私たちの思いをはるかに超える至高の知恵の前に謙虚に頭を垂れる姿勢を保つならば、それは人の精神や知性を高める意義深い営みと言える。

全能の理解は自然から出発して自然に即した神の像へと進むべきであり、神から自然へと観念を当てはめるのは誤りであるとされる。物事がなぜこの形であり、なぜ今このようであるのかと問う姿勢は、説明すべき現実から目を逸らし、幼稚で不合理な思考に陥らせ、摂理理解の進歩を阻み、学びとしての価値を空洞化させる。無限の力という観念は人の理解を超えるため、神なら痛みや欠陥から解放された善と知恵に満ちた存在を、無限の空間の点ほど数え切れないほど造れるはずだと夢想しがちである。しかし、信頼できる書物は自然だけであり、神を神として読み取れるのもそこに限られる。そこでは、感覚ある存在が微細な物質から次々に生まれ、長く、しばしば苦痛を伴う過程を経なが

ら、死の前に一段高い段階にふさわしい資質や能力に達する者が少なからずいるという事実が示されている。ならば、無限の力への幼稚な先入観は実在の觀察に基づいて正されるべきではないか。創造主をその作品以外で測ることはできるだろうか。神の力を高めるために善性を犠牲にするのでなければ、全能の創造主であっても、崇高な目的にかなう精神的資質を備えた存在を形づくるには、ある過程と、少なくとも私たちには時間と見える推移が必要であると結論づけるのが妥当である。

人生を試練の場とする考え方は、人が乳児として生まれるという事実と整合せず、まるで人間が最初から完成した存在であることを前提としているように見える。また、この見方は大切にしたい至高者のイメージとも相容れず、神に疑いがあつたり先見の明が欠けていたりするような印象を与えてしまう。そこで、世界とこの生を試しの場ではなく、心を生み育てていくための神の大きな過程と捉える視点が示される。情性に沈む混沌とした物質を霊へと目覚めさせ、大地の塵を魂へと高め、粘土の中からかすかな霊火を引き出すために欠かせない工程である。この立場に立てば、人が生涯を通じて受けるさまざまな印象や刺激は、一般法則に従って働く創造主が心を形づくる力の現れと映る。神性の生きた働きが人の鈍い感性を呼び覚まし、より高い理解と受容の力へと導

いていく。人間の原罪とは、生まれ出る混沌とした物質に潜む惰性と腐敗を指すものとされる。

心が物質から独立した実体なのか、それとも物質の精妙な側面にすぎないのかをいくら論じても得るものは少なく、結局は用語の定義の違いに帰着する可能性が高い。心は、その起源や素材が物質であろうとなかろうと、心としての本質を保ち続ける。経験や観察が示すところでは、心と身体は緊密に結びつき、幼少期から歩調を合わせて共に成長していく。すべての乳児の中にすでに完成した精神が備わっているのに、器官の未熟さや鈍さのために最初の二十年間はその働きが妨げられているという見方は、説得力も現実味も乏しい。神が心身の創造主であり、しかも両者が同時に形づくられ発達していくように見える以上、自然の現象と矛盾しないかぎり、神が絶えず物質から心を生み出し、人が一生を通じて受けるさまざまな印象がその形成の過程であると考えても、理性にも啓示にも反することはない。この働きは、神の最も高貴な属性にふさわしいものである。地上の人間の状態に関するこの見解は、心の本性や働きについて知見が乏しいとしても、周囲の現象や世の出来事が大いなる目的の実現を後押しするよう巧みに意図され配置されていると見えるなら、十分に妥当で根拠のあるものと言える。とりわけこの前提

に立てば、自然の神や摂理に不満を抱きがちな人々が指摘する、人生の粗さや起伏、不均衡や格差といった荒々しい面も、限られた理解の範囲内で説明がつき、その分だけこの見解の蓋然性は一層高まる。だからこそ、この見解は軽々しく退けるべきではない。

人間の精神を最初に呼び覚ます主な原因は、衣食住の不足に根ざした身体の欲求であると考えられる。本来は本論の第二部で詳しく扱う予定だったが、私事などが重なって執筆が長期間中断したため、ここでは一般仮説を支える主要な事情の概略に留める。これらの欲求は、幼い人の脳を感覚的な活動へと駆り立てる最初の刺激であり、生まれたばかりの心身には大きな鈍さがある以上、特別な経路から同程度に強い別の欲求が生まれないかぎり、この初期の刺激はその後の活動を支えるうえでも欠かせないように見える。原始的な暮らしでは、飢えや渴き、寒さの痛みが眠りを破らないかぎり、人は木陰でいつまでも眠り続けるだろう。そうした害を避けるために食物を確保し、住まいを整える営みが、本来なら無為に沈みがちな能力を鍛え、動き続けさせる訓練となる。人間の心の働きに関する経験からしても、身体の欲求がもたらす努力の刺激を大多数から取り除いた場合、余暇が人を哲学の高みへと導くよりも、刺激の不足が人を獣に近い段階へと押し下げると考えるほうが、はるかに妥当で合理的である。自然の産物に恵まれた

土地の住民が、知性の鋭さで特に優れているとはかぎらない。「必要は発明の母」である。人間精神の高い営みの多くは、身体のことを満たす差し迫った要求に駆られて始まった。欠乏は詩人の想像力に翼を与え、歴史家の筆を磨き、哲学者の探究に切れ味をもたらしてきた。今日では、知識の多様な刺激や社会的共感のおかげで、身体的刺激が弱くても無為に逆戻りしないほど鍛えられた心も少なくない。それでも大多数からこうした刺激を奪えば、将来の改良の芽を損なうほどの広範で致命的な倦怠と無気力が広がる危険は、ほとんど疑いようがない。

記憶によれば、ロックは、人間を動かす最大の動機は快楽の追求ではなく苦痛の回避であると述べていた。さらに、特定の快楽を求めるときでさえ、その不在を意識して不快感や痛みを覚える段階に至るまでは、人はそれを得ようと行動しないとも指摘していた。悪を避け善を追うことは人間の大切な務めであり、この世界はそのための不断の努力の機会を多く備えているように見え、心はそのような努力と刺激によって形づくられる。ロックの見解が正しく、その確からしさを裏づける根拠があるならば、努力を引き出すには悪が必要であり、心を形成するには努力が必要だという結論に至る。

生命維持に欠かせない食料の確保という要請は、他のどの身体的・精神的欲求よりも

人に大きな労力を強いるものとされてきた。神は、地上に十分な準備と労働、知恵や工夫が注がれないかぎり、豊かな産物が大量には生まれないように秩序づけた、という見方がある。種とそこから生じる草木や樹木との関係は、人には本質的な連関とは捉えにくい。創造主であれば、種という小さな粒も人の耕作も配慮もなしに、あらゆる植物を生み出せたはずである。それにもかかわらず、耕起や開墾、整地、種の採集や播種といった営みは、神の創造の補助ではなく、生活の恵みを受けるための前提として人を動かし、理性を育て形づくるために不可欠なものと位置づけられる。

人口は食料よりもはるかに速く増える傾向にあると定められており、この仕組みこそが人間に絶えず強い刺激を与え、人類が大地を余すところなく耕して摂理の慈愛に満ちた計画を進める原動力であるとされる。この一般法則は論考の前半で示されたように部分的な害をもたらすものの、よく考えれば益のほうがはるかに大きい。人に力を尽くさせるには強い刺激が必要であり、その努力を正しく導き理性を形づくるには、至高の存在が常に一般法則に従って働くことが不可欠である。自然法則の恒常性、すなわち同じ原因が同じ結果を生むという確かさがその理性の土台である。もし日常の出来事の中で神の意志がしばしば変わる様子が目に見えるならば、人間の能力は全体として致命的に

鈍ってしまう。適切な努力が成功につながると合理的に期待できなければ、衣食住といった基本的な欲求でさえ人を駆り立てることはない。自然法則の変わらぬ確かさは、農夫の勤勉と先見の明、職人のたゆまぬ工夫、医師や解剖学者の熟練を裏づける探究、自然哲学者の注意深い観察と根気強い検証の基盤である。最も高貴な知的営みはことごとくこの恒常性に負っており、ニュートンの不朽の知性もその延長線上にある。

自然の法則が変わらないことは明らかである。人口原理に照らせば、人間は必要がなければ活動を抑え、労働を避ける傾向があるため、世界が人で満ちたのは、生存手段の増加よりも人口の増加のほうがはるかに速かったからである。強い持続的な刺激が耕作や耕地の拡大を促してもその歩みは遅く、弱い刺激では到底足りない。そうした刺激の下でも、原始的な社会は肥沃な土地に長くどまり、牧畜や農耕への移行は遅れた。もし人口と食料が同じ比率で増えていたならば、人類は原始段階から抜け出せなかった可能性が高い。一たび世界が十分に人で満ちたあとでも、アレクサンドロス、ユリウス・カエサル、ティムールらの遠征や流血の革命が人口を回復不能なほど減らし、創造主の大計を損なう事態は起こり得る。伝染病の猛威は何世代にも及び、地震は地域を長く無人にしかねない。これに対して人口原理は、人間の悪徳や自然の偶発的な出来事に由来

する部分的な害が創造の高い目的を損なうのを防ぐ。常に生存手段の水準に合わせて人口を最大限まで押し上げ、さらなる耕作を促し、より多くの人々を支えられるようにする強い刺激として働く。ただし、この法則が至高の存在の意図どおりに機能するには、部分的な不都合は避けられない。人口原理を国や地域の事情に合わせて変えることは、自然法則に関する普遍的な経験に反し、知性の形成に一般法則が不可欠であるとする理性とも矛盾する。したがって、勤労が伴えば数年で肥沃な地を人で満たすこの原理そのものが、古くから人の住む国々では必然的に困窮をもたらすことになる。

もっとも、人口の法則がもたらす困難は、自然の摂理が目指す大きな目的を妨げるところか、むしろそれを進める面のほうが大きい。こうした困難は人々の幅広い努力を引き出し、境遇や受ける印象に尽きない多様性を生み出し、その結果として精神の成長と知性の成熟に寄与する。刺激は多すぎても少なすぎてもよくなく、極端な貧困も過度の富もこの点では等しく不利である。知的向上には中間層が最も適しているように見えるが、社会のすべてを中間層で埋め尽くそうとするのは自然のあり方に反する。地上の温帯が人間の精神的・身体的活力に最も適していても、世界のすべてを温帯にすることはできない。太陽が一つしかない世界では、物質の法則により、ある地域は常に寒く、別

の地域は常に暑い。表面のある物体には必ず表と裏があり、粒子のすべてが中心に集まることはない。材木商にとって樫の木で価値が最も高いのは幹だが、幹には根も枝も不可欠で、根も枝もない樫は育たない。ただし、養分を幹により多く、根や枝により少なく配分できるような栽培法を見いだせるなら、それを広く普及させるのが望ましい。

社会から富と貧困を完全に取り去ることはできないが、格差の両極端を抑え、中間層を厚くできる統治の仕組みがあるなら、それを採用するのは当然の責務である。ただし、樫の木でも幹をめぐる樹液の力強い循環を損なわずに根や枝だけを大きく切り詰めることはできないように、社会でも極端な部分を一定の限度を超えて縮めると、中ほどに行き渡る活力や努力が弱まり、知性が育つうえで最適な条件という利点を失いかねない。誰も上昇を望まず転落を恐れず、勤勉が報われず怠惰が罰せられないならば、中間層は今のようには存在しなかっただろう。この問題を考える際は、個々の事例ではなく、人類全体という大きなまとまりを主に見るべきである。巨大な集団には、早くから特別な刺激に触れて自ずと活性化し、狭い利害に基づく動機に頼らずとも動き続ける才気や精神が、それなりの割合で確かに存在する。それでも、人類の有用な発明や価値ある著作の歴史を振り返れば、多数に働く狭い動機が生んだ成果のほうが、少数に働く高邁で普

遍的な動機による成果よりも多い、と結論づけるのが妥当である。

余暇の価値は確かに高い。しかし、人間の現実を踏まえると、善よりも害を生みやすい場合のほうが多い。弟が兄よりも才能に恵まれるという指摘は少なくないが、平均して先天的な資質で弟が上回るとは考えにくい。差が生じるとすれば、その理由は置かれた境遇の違いにある。兄には努力と行動が欠かせず、弟にはそれが任意にとどまりやすいからである。

人生や生活の困難が才能を育むことは、日々の経験や実感が示している。自分や家族を支えるために生計を立てざるを得ず努力を重ねることは、眠っていた力をしばしば呼び起こす。さらに、前例の少ない局面は、抱える難題を乗り越えるための資質や思考力、器量を育てることが多いと広く認められている。